

## 第3章 戦後復興への道

### 1. 焼け跡からの出発

#### 荷見理事に託された病院再建

壮大な洋風建築で人々の目を見張らせた三井厚生病院も昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲で建物が全焼した。このため、軽症患者は帰宅させ、重症患者は他病院や東京・芝にある三井伊皿子家の屋敷や本郷片山町の栗山重信院長邸、白石謙作内科部長邸へ収容するなどして対応した。外来の診療活動は、日本橋室町の浅沼商会のビルを借り受けて、仮診療所を開設。空襲が激しくなる中、診療を続けた職員は医局員・事務員など全体で30名ほどだった。

このような状況の中、昭和20年(1945)8月15日、日本は終戦を迎えた。焼け跡の中から出発した三井厚生病院であったが、再建は苦難の連続であった。後ろ盾である三井財閥はGHQの指令により解体され、三井財閥および三井系各社の首脳陣は公職を追放されたため、病院の再建にまで手が及ばず、資金面で援助が得られない状態だった。

このとき、再建を託され、理事に就任したのが三井合名考査課で三井厚生病院と関係の深かった荷見晋はすみしん(後の評議員副会長)である。

病院理事で公職追放を受けた三井不動産の佐々木四郎社長は荷見理事に対し、「病院の善後策、再建は君以外にやれる人はいない。是非頼む」と要請した。佐々木社長もGHQとの折衝で必死の苦闘を続けており、病院の再建にまで手が回らないのが実情だった。

荷見理事は三井合名を経て、三井不動産、三井木材の役員を歴任し、当時、仲間たちと新会社を設立し、社長に就任したばかりだった。荷見理事は当時の心境をこう語る。

「病院再建は火中の栗を拾うようなものだと、親類や先輩・友人など誰一人として賛成する者はいない。しかし、私としては三井家に対する恩義、なお三井家先代の偉業たる病院であることを思い、さらに和泉町の焼け跡瓦礫の

山を見るに忍びず、敢然としてお引き受けするに決して、お答えしたのであった」(昭和40年(1965)8月5日付『三友新聞』「三井厚生病院の今昔(下)三井厚生病院専務理事 荷見晋」に掲載)

再建を引き受けた荷見理事は、まず新院長を決定した。ちょうど栗山院長は昭和21年(1946)3月、東京帝国大学の定年退任とともに院長職を辞しており、後任が決まっていなかった。病院には代々、東京帝国大学から院長が赴任していたが、病院再建は激務である。荷見理事は東京帝国大学・田宮猛雄医学部長など関係者と協議の上、病院古参の産婦人科部長・岩田正道博士を新院長に推薦した。岩田部長はこれを了解し、昭和22年(1947)6月、病院職員から初めて院長に就任した。

また、白石内科部長を院長代理(後の副院長、院長)とし、事務長に元三井合名の高木雄次郎を据えて人事体制を整えた。

### 建物と資金の調達に奔走

再建に必要なのはまず建物と資金である。病院建物でかろうじて躯体を残したのは大正15年(1926)に建てられた鉄筋コンクリート3階建ての看護婦寮宿舎と、昭和3年(1928)に建てられた同じく鉄筋コンクリート3階建ての病理棟のみであり、周囲は一面の焼け野原で、この2棟は昭和通りからはっ



焼け残った病理棟㊦と看護婦寮宿舎㊧

きり見えるほどだった。人事体制を整え、早速、この2棟で診療を再開しようとしたが、戦後復興事業を担う東京建築復興助成会社にすでに接收されており、手がつけられなかった。

このため、荷見理事ら病院職員は厚生省や都庁など関係省庁を東奔西走し、ようやく接收の解除に至った。その後、看護婦寮宿舎を本館、病理棟を2号館とし、三井建設(現

三井住友建設)に依頼してベニヤ板囲いで診療スペースを作り、本館1階・200坪を外来診療所、2階を各科共同で使用することとした。また、2号館の約100坪にも外来と手術室を配し、2階に産婦人科、3階に看護婦寮を設けた。

さながら野戦病院の様相ではあったが、急場の診療体制は整った。しかし、病院の看板を出すには、20床以上なくては許可が下りなかったため、ベニヤ板で急遽病室を増設した。こうして昭和22年(1947)8月、神田和泉町に戦後初めて「三井厚生病院」の名前が掲げられた。なお、戦後の詳しい実情については、本編末の清瀬 闊<sup>ひろし</sup>元副院長の寄稿を参照されたい。

建物と平行して必要なのは資金である。資金は三井系各社から寄付賛助を受けるか、借り入れする必要があったが、財閥解体で分裂した各社に寄付は望めなかった。融資を受けるにも他産業と区別され、病院の評価は最低の「丙」であった。もはや、資金を得るには土地の一部を売却する以外に手段はないが、銀行の評価額は坪350円から400円という安価であったため(当時の大卒銀行員の初任給が約500円)、荷見理事は売却を思いとどまっていた。そこに、折り良く坪1,000円出してもよいという希望者が現れたため、荷見理事は病院の土地約1,000坪(現千代田区立和泉公園の一部)を100万円で売却し、再建資金に充てた。

その資金で昭和23年(1948)に74床、翌昭和24年(1949)に30床増床したが、まだ病院本来の機能を発揮するまでには至らなかった。

## 2. 財団法人から社会福祉法人へ

戦後初の新病棟が竣工

荷見<sup>はすみ</sup>理事は再度、三井首脳陣に寄付を呼びかけた。ちょうど三井グループでは三井の慈善組織「三井報恩会」への寄付を各社から集めており、病院への寄付も依頼したところ、三井銀行(現三井住友銀行)の好意によりモルタル造りの2階建て病棟(3号館)・50床を新築することができた。昭和26年(1951)3月に竣工し、ベッド数は合計148床とな



左から本館・2号館、食堂、3号館（新館側から撮影）

った。

当時は職員への給料の未払いで苦しむこともあったが、この病棟の新築で病院経営は一息ついた。病棟の落成式では「こんな立派な病院ができたことは実に嬉しい」と感涙にむせぶ医員の姿もあった。

また、この頃から中庭を整地し、テニスコートとして利用するようになった。やがてこのテニスコートを囲むように運動場ができ、白石副院長など多くの職員が軟式テニスを楽しんだ。隣接する千代田区立佐久間小学校（現千代田区立和泉小学校）から運動用具を借りて運動会も行われ、患者が窓から応援するなど焼け跡にも次第に活気が戻ってきた。

昭和26年（1951）4月には医師インターン認定病院となり、年2名の受け入れを開始した。ちなみに直木賞作家で医学博士の渡辺淳一もこの頃、インターンとして在籍しており、小説内でもしばしば三井厚生病院が登場している。

そして昭和27年（1952）5月、社会福祉法人令施行に伴い、三井記念病院は「財団法人」から営利を目的とせず、公共性の高い民間法人「社会福祉法人」へと組織を変更した。

昭和28年（1953）5月1日付の『三友新聞』では、「焼け跡の再建も一応なり、設備も整って来患は月3,000人を越えるようになった」と病院の様子を写真入りで掲載している。

さらに昭和29年（1954）、3号館の北側に隣接して食堂・浴室・寄宿舍などの2階建て新棟が増築され、それに伴い正面入り口に渡り廊下を設け、各棟へ移動しやすくした。

昭和30年(1955)4月、岩田院長の退任に伴い白石副院長が院長に就任した。増加する患者の収容に対応するため、三井グループ各社の支援により翌昭和31年(1956)4月から新たにブロック造りの2階建て病棟(新館)・58床の建設を開始した。同年11月5日に竣工式を迎え、三井家当主で評議員会長・三井八郎右衛門(高公)<sup>たかきみ</sup>をはじめ三井グループ各社首脳陣や、医学関係からは東京大学医学部長・内村



**病棟**

三井厚生病院の再建ぶりを伝える昭和28年5月1日付の三友新聞記事

貫く慈善の精神

三井グループ各社首脳陣や、医学関係からは東京大学医学部長・内村

三井厚生病院の再建ぶりを伝える昭和28年5月1日付の三友新聞記事

祐之博士、東京第一病院(現国立国際医療センター)院長・坂口康蔵博士など約150名が出席して盛大に行われた。これまでの病棟には暖房設備がなく、冬は火鉢であったが、新病棟には暖房が設置された。また、賛助会社の施設利用を考慮し、58床のうち約半数を三井銀行(現三井住友銀行)・三井物産・東洋レーヨン(現東レ)・三井造船・三井金属鉱業など三井各社の委託ベッドとした。これで病院建物は本館・2号館・3号館・食堂・新館の計5棟、病床数は既存病棟と合わせ212床となった。